

論文の内容の要旨

古代ローマ社会における馬

—モニュメント、美術作品から読み解く、ローマ人の馬へのまなざし—

中西麻澄

研究の対象と方法論：西洋の美術表現において、動物の中では馬が最も多くあらわされた。しかし、例えば「《マルクス帝騎馬像》研究」などの個別研究ではなく、「馬」だけを対象とした研究は未だに十分なものがない。本論は、基本的に文字史料ではなく、古代ローマ時代のモニュメントや美術作品を基礎史料とする所に方法論的特徴があり、そこから古代ローマ社会における馬と人の関係を読み解くことを目的とする。具体的には、本論は二部構成をとり、まずカタログ編として、約 1000 頭の馬の図像を収集し、各図像を考察・分類し、カタログ化した。これを基礎史料として論文編にて考察を行なった。これらの論文編、カタログ編に共通し、形式ごとに 6 つに章立てをした。第 1 章コイン、第 2 章記念柱、第 3 章凱旋門、第 4 章騎馬像、第 5 章皇帝親衛騎馬部隊騎士の墓碑、第 6 章モザイク画である。この様な個別の考察から、一つ一つの事例を集積し、そこから帰納法的に原理原則を探り、終章にて「古代ローマ人の馬へのまなざし」としてまとめることができた。また、本論は今後のこの分野の基礎史料になりうるため、文字史料（スエトニウス『ローマ皇帝伝』、スパルティアヌス他『ローマ皇帝群像』、ディオ『ローマ史』、ウェルギリウス『農耕詩』等）も引用した。

各章の要旨：まず第 1 章コインでは、共和政期の前 268 年から帝政期の後 238 年までの約 500 年間にわたる、古代ローマの馬図像総覧を作成した。コインは画面は極めて狭いが、発行年代が明確で、数量的に豊富なため、時期ごとの重要作例が明確となった。一次史料には、世界屈指の

コレクションを誇る大英博物館のカタログ GRUEBER, Coins of the Roman Republic in the British Museum. (3 vols.), 1910 (reprint 1970). ; MATTINGLY, Coins of the Roman Empire in the British Museum. (6 vols.) 1923-62 (revised ed. 2005)を用いた。史料数は 21,000 以上あり、この中に馬の図像は 2785 点もあった。本論では、そこから 234 点を図版入りでカタログ化した。これをもとに論文では、まず頻出図像（ディオスクリ、騎士と騎馬像、戦車）について考察し、次に「火葬台上の戦車」図像等から、人と馬の関係について述べた。最後に古代ローマの「馬のコイン」の最も大きな特徴、「人のいない馬だけの図像がない」点について、「馬の肖像」と題してまとめた。

第 2 章記念柱では、《トラヤヌス帝記念柱》(113 年)と《マルクス帝記念柱》(193 年以降)浮彫を対象とした。プロパガンダとしてのフィルターをかけられてはいるが、戦争絵巻物の観を呈するナラティブなこれらの浮彫は、単なる戦闘場面だけではなく、馬を使った移動や輸送、和解交渉や、降伏、さらにマージナルな、麦刈りや馬に水を飲ませる場面等もある。当時の馬の使用の仕方や、時代を問わず変わらない、馬と人の親密な様子が見られる。本論カタログ編では、馬一頭ずつを「ナンバリング」した。その過程で一頭ごとに、ローマ軍馬と敵の馬、同盟軍の馬、戦利品の馬、ラバを見分けながら、観察、記録した。カタログ編にはこれら 464 頭を、色分けしたナンバーで示した。その結果、「落馬」、「ドナウを渡る」の二場面の新解釈も提示できた。また馬の四つの歩様（停止、並足、駆足、襲歩）がパターン化された表現であったことや、両柱の様式的相違も明らかにできた。

第 3 章凱旋門では、ローマに現存する、浮彫画のある三つの門について考察した。それらのうち最も初期の《ティトゥス帝凱旋門》(81 年以降)にある「凱旋行進」浮彫では、ティトゥスと馬たちと凱旋戦車それぞれの向きが一致しない表現がなされている。この問題に関しては、ヨセフス『ユダヤ戦記』等からの実際の凱旋行進の様子を考慮に入れ、この凱旋門浮彫の凱旋行進と、未来にこの凱旋門をくぐる行進との「二重の凱旋行進」がイメージされていた可能性を提示した。203 年建立の《セウェルス帝凱旋門》の浮彫モチーフは、非常に細かく小さいが、それは門上の主役の凱旋戦車彫像（現存せず）を目立たせる目的のためと考えられる。そして浮彫の馬たちは、「騎乗して逃走する敵」と「余裕の引き馬のローマ軍」の二種類の図像に厳密にプログラムされていた。4 世紀初頭の《コンスタンティヌス帝凱旋門》は、皇帝自身の浮彫のみならず、トラヤヌス帝、ハドリアヌス帝、マルクス・アウレリウス帝の別のモニュメントから移された大浮彫板がはめ込まれているため重要である。どの皇帝の浮彫にも馬は登場するが、中でもトラヤヌスの皇帝騎馬戦闘図は非常に稀な図像である事がわかった。また記念柱浮彫とは相反する様式の問題も浮かび上がった。

第 4 章騎馬彫像では、主に当時の唯一の現存作例ともいえる《マルクス・アウレリウス帝騎馬像》(161~180 年)を考察した。まず当時の騎馬像の歴史や馬、馬具を概観し、同時代の「馬術書」が未発見のため、古代ギリシアのクセノポン『馬術について』を参考史料とした。そのうえで、《マルクス帝騎馬像》を騎乗術や解剖学的整合性から考察した結果、写実的ではなく、頸の位置と歩く後肢が矛盾する、ローマの騎馬像独自の「ローマ型歩行後肢」の形が見出された。し

かもこの馬の形は、以後近代まで、騎馬像の定型として継承され続けていたのである。この形が古代ローマでつくられ、定着した背景として、当時の社会における騎馬行進の重要性、およびキルクス競走が生活に浸透していた事との関連を考察した。

第5章皇帝親衛騎馬部隊騎士の墓碑（主に2～3世紀）では、浮彫と銘文について扱った。一次史料として SPEIDEL, M. P., Die Denkmäler der Kaiserreiter. Equites Singulares Augusti, 1994 のカタログを用いた。この本も同様、碑文のカタログは通常、「碑文」部分の年代、書体、枠取り等を基準に墓碑を分類する。しかし本論カタログ編では、まず一度その分類を放棄し、墓碑表面を広く占める「浮彫画」を基準に新たに図像分類し、それに従い墓碑そのものも分類し、その後、浮彫図像と銘文を対照させる方法を用いた。その結果、騎士の階級により、その墓碑に付される浮彫画が決まっているものがある事がわかり、馬との距離にもそれぞれ違いがあることが明らかになった。例えばロングレイン図の浮彫画を墓に持つ皇帝親衛騎馬部隊騎士は、自分で馬を引くことはなく、馬丁を持っていた。また親衛騎馬部隊騎士は、自ら馬を引き、その姿を馬を伴う肖像のような墓碑浮彫にしたり、本人自身が騎乗し曲乗りする浮彫を墓碑に用いていた。

第6章モザイクは、3, 4世紀を中心とし、その遺構は主に属州（アフリカ、特にチュニジア）にあり、現在(2012年)の社会情勢から現地調査もできず、限られた史料からカタログ編を作成せざるをえなかった。それでも風景、狩猟、キルクス、肖像の4つに図像分類できた。中でも「馬の肖像モザイク」は非常に特異、かつ最もローマ人気質をあらわす、小サイズの大きな存在であることが明らかとなった。なぜなら古代ローマの馬図像の大原則一馬の像は、必ず人物像に伴う一を破るからである。このように特別な「馬の肖像」の存在の背景には、「勝つことを愛する」ローマ人気質を見出すことができた。加えて、肖像の馬たちの多くはその名も一緒に書かれていた。そこから筆者は、モザイク、碑文、工芸品等から約400頭の「馬の名前」リストを作成し、本論カタログ編巻末に Appendix として付した。

終章として、モニュメントや美術作品から読み解いた5つの特徴をまとめた。1) ローマの騎馬像では、現代では可能なコマ送り写真と比較すると、強く屈撓した頸と歩く後肢が矛盾する馬の形態がしばしば見られた。これらを本論では、「ローマ型歩行後肢」、「ローマ型襲歩後肢」と名付けた。これは表現の未熟さ故ではなく、実際に馬に乗った時の騎乗感覚が表現させたもので、本論はこれを「古代ローマ人にとってのリアリティー」と解釈した。2) 古代ローマの馬の美術表現での非常に大きな特徴が、一画面内に、馬一頭だけをシンボリックにあらわさず、常に人間像に伴うものとして馬像を表現した。これは、古代ローマ人独特の、動物や怪物に対する「人間優位」のメンタリティーによるものであるとわかった。3) しかし唯一の例外が、小画面の《競走馬の肖像画》モザイクである。この美術表現上の特例的存在は非常に重要である。なぜならこれらは、戦争が頻繁にあった古代ローマ人ならではの「勝利」に対する絶大な価値観から生まれたと考えられるからである。4) 勝者ローマを形象化したプラス・イメージと敗者のマイナス・イメージ両方が見出された。これらのマイナス・イメージは、プラス・イメージを引きたてる目的以上に、古代ローマ人の現実主義が原動力となり、描かせたものと強く推測される。

最後に、5) 「古代ローマ人の馬へのまなざし」を次の3つの側面に集約できた。人間像のない馬だけの画面を原則として作らない「人間優位のたてまえ」があるが、「コンパニオン・アニ

マルとしての現実」では、馬を犠牲式や葬式に参加させ、多数の馬に人間と同じ名前を付けた。また多くの引き馬図から、日常身近に馬がいて、馬を世話する姿が見てとれる。ただし「時に溺愛するが、けっして崇拜しない」という一線があった。史料には馬を溺愛する皇帝の姿が見られたが、馬の表現を見ると、カルタゴのコインのように、馬を一頭だけシンボルのようにあらし一種崇める感覚は、基本的に、ローマ人にはなかったのである。

(3,987 文字)